

Web2.0時代の科学コミュニケーション

本間善夫(県立新潟女子短期大学)

1. はじめに

2006年2月に発売されて大きな反響を呼んだ梅田による新書「ウェブ進化論」¹⁾が火付け役ともなっていて、“Web2.0”という語が瞬く間に広まり、関連書籍が次々と発刊されてテレビや新聞などでも盛んに取り上げられるようになった。もちろん、ここ数年の間にブログやSNS(Social Networking Service)の利用者が急激に増加したことも背景となっている。Web2.0の意味や捉え方については、発言者によって様々であって²⁾ビジネス的な観点を中心であるが、“知の蓄積”あるいは“集合知”といったキーワードとともに語られる場合も多く、アカデミックな分野や教育現場でも注目に値することは間違いない。一つにはブログやwikiなどの仕組みにより、ネットに情報を掲載する技術的・経済的障壁が低くなり、これまで情報の受け手でしかなかった人々が情報の発し手になる機会が増えたと同時に、その情報がRSSなどの技術によって直ちに結びつけられるようになったことが大きい。

このような状況は、科学コミュニケーションの分野でも当然看過できず、例えばブログに関しては、すでに本学会年会でも柄内³⁾によって研究発表が行われている。

ここではWeb2.0的なキーワードをいくつか取り上げながら、科学コミュニケーションの領域での活用の可能性について検討する。なお、本テーマを考察していく上で、Web2.0時代を見据えながらインターネット誕生以来の研究者による情報発信の流れを概説し、そのノウハウを提示した岡本による「これからホームページをつくる研究者のために」⁴⁾は極めて有用である。

2. Web2.0の概要と科学コミュニケーションとの連関

Web2.0のキーワードとしてマスコミ等でよく取り上げられるのが、Google、ブログ、SNS(mixi、GREEなど)、RSS、Wikipedia、ポッドキャスト、ロングテール、アフィリエイト、Ajax、マッシュアップといったところであろうか。解説記事等で必ずと言っていいほど引用されるのが、Tim O'Reillyの“What Is Web 2.0”⁵⁾で、そこでWeb1.0との対比で挙げられているWeb2.0の具体例は以下のとおり⁶⁾。

Google AdSense、Flickr、BitTorrent、Napster、Wikipedia、ブログ、upcoming.org and EVDB、SEO(検索エンジンへの最適化)、クリック単価、ウェブサービス、参加、wikis、タグ付け(人々による分類“folksonomy”)、シンジケーション(サイトの垣根を越えた連携)

ここでは、以上のような語の中からいくつか選び、科学コミュニケーションと関係させながら現状等を列挙する。

[a] ブログとSNS

2006年7月に総務省から公表された「情報通信白書」⁷⁾によれば、同年3月末のブログ登録者数は868万人、SNS登録者数は716万人とされる。大学における講義やゼミ、あるいは科学館などでの活用が進みつつあるだけでなく、小・中・高校でも様々な利用例が見られる。学生あるいは社会人受講生などが中心となって運営している有力なものとして理系では、「ケムステニュース」⁸⁾、「さっぽろサイエンス観光マップ」⁹⁾などが挙げられ、科学技術コミュニケーター養成の手段としての位置付けも可能である。科学コミュニケーションを謳ったブログも増え、中でもNPO法人サイエンス・コミュニケーションがメールマガジンと連動させている「研究ニュースクリップ」¹⁰⁾はその豊富な情報量と速報性で傑出している。

注目すべきブログサイトが急増していることから、RSSリーダーによる効率的な情報確認も必須となっている。また、ブログ検索サイトも増えて迅速な記事情報の収集が容易になり、その分析を研究テーマとする研究者が現れてきていることも見逃せない¹¹⁾。トラックバックやフォークソノミーという観点でも興味深い。

SNSについては、mixi内には専門分野を扱ったコミュニティも多数あり、筆者も2006年6月に『アカデミックWeb2.0』¹²⁾と称するコミュニティを設けて情報交換を試みている。

[b] ポッドキャスト

音声と動画で専用端末またはパソコンで学べる「東大Podcasts」¹³⁾が公開された時はマスコミでも話題になったが、今後大学の講義等の公開は加速すると思われる。その他、三宅島の動植物情報などを紹介する「みやけエコネット」¹⁴⁾のような教材に使える多様なコンテンツが増えていくことが期待される。

[c] Wikipedia

ブラウザ上で誰でも編集作業に参加できるwikiシステムを利用したプロジェクトの中で最も著名なのがオンライン百科事典Wikipediaである。必ずしも専門家ではないが、それぞれの分野に詳しい書き手によって情報が蓄積・修正され続けており、日本語版¹⁵⁾には2006年9月時点で26万件を超す記事が収録されている。新語も取り上げられるので、進展著しい科学分野の最新情報もかなり網羅されている。外部の有用なページへのリンクも掲載され、筆者のコンテンツもいくつか収載されている。信頼性を高めるために専門家の参加も望まれる。

[d] ロングテール

オンライン書店Amazonが成功例としてよく取り上げられるのが、実際の本と違って情報は場所をとらないという利点を活かして、ニーズの低い本も多種類売ることによって利益を確保することができる。これを科学コミュニケーションの分野に援用すれば、上述のブログやWikipediaなどを講義等の中で推奨して書き手を増やすことによって、現在記事が欠けている領域についても“知の蓄積”を推進できるという発想も可能である。さらなるアフィリエイトを活用すれば、専門書の存在を周知させて販売に繋げることもできるであろう。

その他、Web2.0 関連書籍では、“スピード”や“速度”という語が出てきて新サービスの現出も多い。前出の他のキーワードも含めて発表当日に言及したい。

参考文献とWeb ページ

- 1) 梅田望夫, 「ウェブ進化論 一本当の大変化はこれから始まる」, ちくま新書(2006)
- 2) 例えば, 雑誌特集『ウェブ 2.0 時代の仕事力』, Think!, No.18, 東洋経済新報社(2006)
- 3) 柄内新, 『ウェブログは科学コミュニケーションのツールになるのか〜市民と科学者が対等に参加する新しいコミュニティをつくるブログ〜』, 科学技術社会論学会第4回年次研究大会予稿集, pp.197-198(2005)
- 4) 岡本 真, 「これからホームページをつくる研究者のために」, 築地書館(2006)
- 5) Tim O'Reilly, "What Is Web 2.0",
<http://www.oreillynet.com/pub/a/oreilly/tim/news/2005/09/30/what-is-web-20.html>
- 6) IT用語事典, 『Web 2.0 とは』, <http://www.sophia-it.com/category/web2.0.jsp>
- 7) 総務省, 「平成18年版 情報通信白書」, <http://www.johotsusintokei.soumu.go.jp/whitepaper/ja/h18/>
- 8) <http://chemstation.livedoor.biz/> 9) http://d.hatena.ne.jp/costep_webteam/
- 10) <http://scicom.blogtribe.org/>
- 11) 例えば, 朝日新聞記事, 『ブログから現代人を探る』, 2006年8月2日
- 12) http://mixi.jp/view_community.pl?id=1040768 13) <http://ocw.u-tokyo.ac.jp/podcasts/>
- 14) <http://www.miyake-eco.net/weblog/PortalServlet> 15) <http://ja.wikipedia.org/>